

インド系移民と20世紀前半のアメリカ社会 : ダリ ップ・シン・サウンドの前半生とその時代

著者	溝口 聡
雑誌名	研究論集
巻	114
ページ	177-194
発行年	2021-09
URL	http://doi.org/10.18956/00007989

インド系移民と20世紀前半のアメリカ社会

— ダリップ・シン・サウンドの前半生とその時代 —

溝 口 聡

要 旨

本稿は、アジア系初の下院議員となったダリップ・シン・サウンドの前半生に焦点をあてながら、アメリカにおけるインド移民史の第一期にあたる20世紀前半までのインド系アメリカ人の歴史を考察するものである。先行研究では、アメリカにおけるアジア系政治家の先駆者であるサウンドについて、モデル・マイノリティ論や米ソ冷戦下の人種政治との関係性の中で評価される傾向が強かった。対する本稿は、20世紀前半のアメリカのインド系コミュニティにとって、最重要課題であるインド独立と市民権獲得という二つの政治問題を軸にサウンドの前半生を論じ、サウンドも制定にも携わったルース=セラー法を、移民排斥の余波を受け危機に瀕していたインド系コミュニティの存続と戦後のアメリカ社会で活躍するインド系の人材輩出という側面で大きな役割を果たしたインド系アメリカ人の歴史のメルクマールとして、再評価を行った。

キーワード：インド系アメリカ人、ルース=セラー法、移民排斥、インド独立運動

1. はじめに

2020年11月7日、大統領選挙で当選確実となった民主党候補のジョー・バイデン (Joseph R. Biden Jr) が、地元のデラウェア州で勝利宣言演説を行った。「分断ではなく結束をめざす大統領となる」と強調するバイデンの演説とともに、この日の集会で、世界の注目を集めたのは、アメリカ史上初の女性副大統領となるカマラ・ハリス (Kamala D. Harris) 上院議員の演説であった¹⁾。ハリスは、著名な公民権運動の指導者、故ジョン・ルイス (John R. Lewis) 下院議員の言葉を引用し、アメリカの民主主義を守るには、「苦しい闘い」と「犠牲」があり、その上に「喜び」や「進歩」があると指摘した後、19歳でインドからアメリカに移民してきた母、ゴーパーラン (Shyamala Gopalan) を始めとして、今回の副大統領誕生までの道程を切り開いてくれた先人達に感謝を述べるとともに、自分に続く後人達のために歩みを止めないことを約束した。

女性という点に加えて、アフリカ系の父とインド系の母から二つのエスニック・ルーツを受け継ぐハリスの存在は、アメリカを始めとする世界各国のメディアの関心を集めてきた。彼女

の副大統領就任が確実にになると、異色の副大統領誕生までのアメリカ政治史の歩みを、ジェンダーや人種の視点を交えて論ずる記事も現れ始めた²⁾。日本国内でも、同様の動きがみられるものの、ジェンダー史やアフリカ系アメリカ人の歴史の視点からハリス副大統領誕生の経緯をひも解く論考に比べて、インド系アメリカ人の歴史的視座から分析するものは、多くないように見受けられる。現在から60年以上も前、ハリスと同じくカリフォルニア州から国政選挙に挑み、アジア系初の下院議員となったダリップ・シン・サウンド (Dalip Singh Saund) (1899-1973) についても、管見の限り、日本のメディアではほとんど報じられていない。

本稿では、サウンドの前半生に焦点をあてながら、アメリカにおけるインド移民史の第一期にあたる20世紀前半までのインド系アメリカ人の歴史を考察する。アジア系政治家の先駆者であるサウンドについては、モデル・マイノリティ論や米ソ冷戦下の人種政治との関係性の中で評価される傾向が強い³⁾。確かに比較的裕福であるがエリート階級ではないパンジャブ地方出身の一移民からアジア系初の議員となったサウンドは、その生涯がまさにアジア系アメリカ人の成功物語であり、アメリカを人種差別の国と非難するソ連のプロパガンダ攻勢を否定するのに最適の人物であった。だが、モデル・マイノリティとなったサウンドを論じるには、当然ながらそこに至るまでの経緯を省くわけにはいかない。インド系移民達がモデル・マイノリティとして受け入れる前の「問題のあるマイノリティ」として扱われながらも市民権獲得のために行動を起こし、ルース＝セラー法の制定にまでこぎつけたインド系アメリカ人の歴史にも着目する必要がある⁴⁾。

今日の日本では、インド系アメリカ人を論じ、米印関係を論じる書物は氾濫しているが、第二次世界大戦以前のアメリカにおけるインド系移民の歴史をふり返ったものは少ない⁵⁾。アメリカにおいても、政府が南アジアに本格的な関心を示すようになったのは、第二次世界大戦に参戦する直前であったとの見解から論じられる傾向があったため、戦前の米印関係に焦点を当てた研究蓄積は、十分とは言い難い⁶⁾。むしろ、米印両国の交流は第二次大戦以前にも遡ることができる⁷⁾。19世紀半ばには、パンジャブ地方からの移民労働者がアメリカ西部に到着している⁸⁾。ただし、20世紀前半のインド系移民達は、他のアジア諸国からの移民に対して移民数が相対的に少ない上に、アジア系への移民排斥の影響によって、その数がさらに減少したため、1965年の移民法改正後のインド系移民とは異なり、研究対象に成り難かった⁹⁾。さらに、20世紀前半にアメリカに移住してきた人々の大半はシク教徒であり、シク教徒は、1965年移民法以降の高い専門性をもった南アジアからの新移民の大量流入により、短期間の内にインド系アメリカ人の中でもマイノリティとなってしまった¹⁰⁾。二世や三世のアメリカ化やメキシコ系との混血化、旧移民と新移民とのエスニック・アイデンティティをめぐる確執などの要因も、戦前のインド系コミュニティに対する関心の低さに繋がったと考えられる¹¹⁾。しかし、今や「新たなモデル・マイノリティ」と形容され、アメリカ社会で注目を集めるインド系アメリカ人の

経済的・社会的成功の背景には、新移民達の高い専門性だけでなく、先人達が築いたインド系コミュニティの政治的な影響力があるのは言うまでもない¹²⁾。また、前述のようにハリスが副大統領となったことで、近年の人種問題や移民政策、対英政策との関係性も含めて、米印関係史を再考する動きを後押しする可能性がある¹³⁾。

本稿は、このような研究動向を踏まえ、戦前のインド系移民の歴史の解明を目的とする研究の一環である。サウンドの前半生に焦点をあてながら、以下ではまず、カリフォルニア州でのインド系コミュニティを取り巻く状況を概観する。次いで、インド系コミュニティの政治活動について、インド独立運動と市民権運動の文脈から考察し、ルース＝セラー法の制定までの経緯を論じる。最後に、インド系コミュニティにとってのルース＝セラー法の意義を総括し、現在のインド系アメリカ人の社会進出との関係性を指摘する。

2. カリフォルニアでの生活

1920年9月27日、サウンドは憧れの地、アメリカのニューヨークに降り立った¹⁴⁾。サウンドによれば、彼のアメリカへの憧憬は、ウィルソン（Woodrow Wilson）大統領の演説を掲載したインドの新聞記事を読んだ時から始まった。インドの自治権問題に関心を持ち、ガンディー（Mahatma Gandhi）の非暴力的な市民不服従の運動に感銘を受けるパンジャブ大学の一学生にとって、ウィルソンの「世界を民主主義のために平和にする」、「戦争を終わらせるための戦争」、「民族自決」といったフレーズは、「若者の心に訴えるもの」であった。ウィルソンの演説を契機に、アメリカに関する書物を漁り始めたサウンドは、尊敬するウィルソン大統領とリンカーン（Abraham Lincoln）大統領を輩出した「自由の国」アメリカを実際に訪れたいという衝動を抑えることができなかった。そこで、彼はパンジャブ大学を卒業後、インドで製缶事業に従事するにあたり、アメリカの大学院で缶詰加工の技術を学ぶという名分で親族を説得し、ボンベイからイギリスのサザンプトンを経由して、ニューヨークへと至ったのである。サウンドはまた、この時乗船したフィラデルフィア号で、将来の妻となるアメリカ人女性マリアン（Marian Kosa）とも運命的な出会いを果たしていた¹⁵⁾。

イギリスからの独立後とは対照的に、イギリス統治下のインド人留学生の渡航先としては、宗主国のイギリスの方がアメリカよりも一般的であった。イギリス留学組の代表的な人物としては、イギリスで法律を学び、弁護士資格を習得した後に、インド、パキスタンの政治指導者となったガンディーやネルー（Jawaharlal Nehru）、ジンナー（Muhammad Ali Jinnah）などが挙げられる。対するアメリカ留学組は、19世紀末までに世界一の工業国となったアメリカの農業・工業技術の習得を主たる目的としており、学んだ知識と技術をインドの近代化に役立てたいと考える志の高い人物も少なくはなかった¹⁶⁾。むしろ、サウンドのように、「自由の

国」という理想に魅力を感じたインド人留学生も存在した。アイオワ大学で初のインド人教員であったボース (Sudhindra Bose) もまた、「アメリカという言葉は、若いインド人にとって、不思議な魅力を感じている」と記し、多くの留学生が自由の国アメリカで成功を収めるのを夢見ていたと指摘している¹⁷⁾。サウンドは親族との約束を反故にし、アメリカに永住する道を選択したものの、当時の多くの留学生と同様、祖国に帰るかアメリカに残るか苦慮したのであった¹⁸⁾。もっとも、熱烈なガンディーの支持者であったサウンドの場合は、後述のようなアメリカ国内での反英的な言動により、イギリス政府の監視対象となったため、インドへの帰国を避けざるを得なかったという事情も指摘する必要がある¹⁹⁾。

政治的な要因以外にも、サウンドが留学先に選んだカリフォルニア大学バークレー校の恵まれた環境もまた、インドの大学からの教員職の依頼を辞退してまで、彼がアメリカに残る選択を後押しする一因となった。回顧録によれば、バークレーの教授達は非常に友好的であった。数学科の教授が、パンジャブ大学では元々数学を専攻していたこともあり、次第に農学部での食品加工技術よりも数学への学術的関心が高まったため、博士課程では数学を専攻したいと希望すると、サウンドの考えを尊重してくれたことや農学部の教授達が夏季休暇の間、缶詰工場での仕事を斡旋してくれたことは、彼に深い感銘を与える出来事となった。さらに、大学内でのインドへの関心の高さもサウンドを驚かせた。とりわけ、大学内でのガンディーの知名度は高く、ガンディーについての講演依頼が、毎日のように続いたのである²⁰⁾。

アジア系移民への排斥感情が強い当時のカリフォルニア州の状況に鑑みれば、サウンドの回顧録に多少の誇張があったとしても、バークレー時代の環境は例外的であった。地元の雑誌の中では、「ヒンドゥーの侵略」と題し、中国人や日本人と同様にインドからの移民の増加を危惧する報道が行われていた²¹⁾。ただし、こうした脅威論は、人種偏見に基づくものであり、当時のアメリカ社会におけるインド系コミュニティの実情を反映したものではなかった。まず、当時のアメリカでは、一般的にインドからの移民をヒンドゥー教徒と形容していたが、前述のようにインドから移民の大半が、実際にはシク教徒であった²²⁾。次に、インドからアメリカの移民の推移を簡単に述べると、1903年まで年間100人以下であったアメリカへの移民の数は、1904年以降から増加傾向を示したものの、最盛期でも年間2000人以下であり、中国や日本からの移民が増加した先例に比べれば、はるかに少なかった。さらに、インドからの移民の数は、アジア地域からの移民制限を強化した1917年移民法の制定以降、減少していったのである²³⁾。

20世紀初頭にアメリカへの移民が増えた理由としては、イギリスからの独立運動や北米での人種差別の撤廃運動などの政治活動を目的とする一部の知識人を除いて、1889年から1902年まで続いたパンジャブ地方の大飢饉の影響、最初にカナダ太平洋岸に移民してきた人々が、カナダでの移民制限強化に伴い南下したことや鉄道建設のために労働者の需要が一時的に急増したことなどの経済的要因が、一般的に指摘されている²⁴⁾。また、この時期にインドからの移民

の大半は、太平洋沿岸のワシントン州、オレゴン州、カリフォルニア州に集住していた。シク教徒の移民達は特定の職種に集中する傾向があり、ワシントン州やオレゴン州では鉄道建設や林業に、カリフォルニア州では農業に従事していた。米印関係史研究の先駆者ヘス（Gary R. Hess）によれば、1907年から1920年までの間、カリフォルニア州に移住してきた約6400人のインド系移民の大半が、農業労働者であった²⁵⁾。パンジャブ地方からのシク教徒移民達が、カリフォルニア州で農業を選択した理由の一つには、パンジャブとカリフォルニアの地質的・気候的な類似性があった。このような利点もあり、インドからの移民の中には農業で成功し、1000エーカーの土地を所有する成功者も現れたのである²⁶⁾。

1924年に数学で博士号を取得したサウンドは、文盲の多い当時のインド系コミュニティの中では異色の存在であったが、職業に関しては、最も一般的な農業労働者となった。当時のインド系移民は、学生と労働者の比率では前者が少数であり、後者が多数を占め、起業家と労働者に分類すれば、前者は少数で、後者が多数を占めていた²⁷⁾。サウンドの回顧録によれば、彼が農業を選択した理由は、当時のアメリカ市民権を有さないインド人がカリフォルニアで生計を立てる「唯一の方法」だったためであった²⁸⁾。ただし、厳密に言えば、インド系移民の場合は人種分類の観点からすると、コーカソイドに分類される人々も含まれており、モンゴロイドの中国人や日本人とは異なり、白人としてアメリカ市民権を認められた事例も存在した。だが、インド人の市民権獲得への道筋は、1923年に最高裁が第一次世界大戦に従軍したインドからの移民であるシンド（Bhagat Singh Thind）の帰化申請をインド系を白人とは分類できないとの理由で棄却すると、険しいものになっていた。なかには、一度は認められた市民権を剥奪され、苦勞して手に入れた土地・財産の所有権を失ったことを嘆き、自死に至った事例もあった²⁹⁾。後述のように、サウンドも含めたアメリカのインド系コミュニティは、この最高裁判決を不服として、その後も法廷闘争や議会へのロビー活動を展開していき、1946年にフィリピン人とインド人の帰化ならびに年間100人程度の移民を認めるルース=セラー法の可決に、ようやくこぎつけたのである。

もっとも、カリフォルニア州での移民排斥問題には、人種という観点だけでなく、地元の白人労働者とアジア人労働者の競合関係に起因する側面もあった。実際のところ、低賃金労働者の流入による賃金の低下を危惧する移民排斥派の白人労働者にとって、インド系移民を科学的基準に依拠して白人と定めるべきか否かという論点は、副次的な問題であった。そのため、排斥派のカリフォルニア州議会議員からは、南アジアからの移民を人種的な理由で排除できないならば、身体虚弱を理由に入国を阻止すべきとの意見も挙がっていた³⁰⁾。排斥派にとっての最高裁判決のより大きな意義は、カリフォルニア州議会が可決した市民権取得資格のない外国人の土地所有および長期間の賃貸契約を禁ずる「外国人土地法」をインド系移民にも適応できる根拠を提示したことであった³¹⁾。1928年にマリアンと結婚したサウンドは、土地の賃貸契約者

をアメリカ人の妻に変更し、外国人土地法の問題を切り抜けようと考えていた。ところが、アジア人と結婚したマリアンとの賃貸契約にも不快感を示した地主がいたため、サウンドは友人の名義で賃貸契約を結ばざるを得なかったのである³²⁾。

1930年代に入ると、大恐慌による経済不況という新たな試練が、カリフォルニア州のインド系コミュニティに立ちはだかった。サウンド一家が居住したインペリアル・カウンティのウェストモーランド市では、気候的な特性によって、スイカやメロンを他の地域よりも早い時期に市場へ流通させることが可能であったため、農家の人々はこれらの果実を高値で販売し、利益を得ていた。しかし、このような嗜好品は大恐慌の影響を真っ先に受ける品物でもあった。牧草の栽培や梱包を生業としてきたサウンドは、果実栽培で大恐慌の被害を受けなかったものの、運悪く、牧草価格が暴落する直前に牧草地を購入したため、ローンが滞り、破産の危機に直面した。この苦難の時期、サウンド一家の大きな助けとなったのは、ローズヴェルト (Franklin D. Roosevelt) 政権のニューディール政策であった。とりわけ、政府による農作物の買上げや生産制限に対する補助金の効果は大きく、サウンドを含めた多くの農家が廃業を免れた。前述のように、サウンドは渡米以前からアメリカの政治に強い関心を抱いていたが、ニューディール政策の恩恵もあり、カウンティの多くのインド系の人々と同様に、熱心な民主党支持者となったのである³³⁾。

3. インド・ナショナリストとしての活動

アメリカ人女性と結婚し、三人の子宝にも恵まれたサウンドはアメリカを永住の地に選んだが、故郷インドの現状を常に気にかけていた。サウンドによれば、バークレー時代のインド人留学生は全員、「インドの民族自決」を支持しており、彼は独立運動を支持するインド人学生団体の会長職を務めていた³⁴⁾。アメリカ国内のインド人学生によるインド独立運動については、ワシントン大学の学生であったダス (Taraknath Das) やオックスフォード大学中退後、スタンフォード大学で一時期、教鞭をとっていたダヤール (Har Dayal) らを中心とする「ガダル運動」が、よく知られている³⁵⁾。北米のインド人に対し、母国に帰国して革命運動への参加を訴えるダヤールの政治活動は、中心人物のダヤールがアメリカから追放された後も国内で一定の影響力を有していたものの、第一次世界大戦の勃発に合わせた決起に失敗したため、サウンドがアメリカに到着した時点では、既に勢いを失っていた。

ガダル運動の瓦解を分析する上で特筆すべき点は、指導者達のアメリカのインド系コミュニティにおける経済的、社会的な問題に対する関心の低さに加え、イギリス政府の政治的干渉の影響力であった。アメリカ西海岸でのインド系コミュニティの政治活動を警戒していたイギリス政府は、アメリカ政府にガダル運動の指導者層とドイツ当局の接触などの情報を提供するだ

けでなく、アメリカ国内向けにガダル運動の危険性を煽るプロパガンダも広めていた。インド人革命家とドイツの繋がりを誇張した「ヒンドゥーの陰謀論」は、陰謀に加担した嫌疑をかけられた活動家だけの問題ではなく、戦時下の排外主義と人種差別の両面が合わさり、インド人に対する脅威論をアメリカ社会に惹起したのである³⁶⁾。

ただし、ガダル運動の失敗は、アメリカ国内でのインド独立運動の終焉を意味するものではなかった。当時のアメリカ国内には、ガダル運動に与さないインド人グループも複数存在しており、「インド自治同盟」に代表される反英運動も存在していた。インド国民会議のメンバーでもあったライ (Lala Lajpat Rai) が設立した自治同盟は、アメリカ世論を国民会議派に惹きつけるため、『ヤング・インディア』等の雑誌を通じて、イギリス統治の非民主性や搾取性を強調する反英的な広報活動やイギリスのインド統治に反対するリベラルな知識人達とのネットワーク作りに取り組んだ。インド自治同盟は1919年のライの離米後に瓦解した。しかし、世論喚起やリベラル派との連帯といった自治同盟の比較的穏健な路線は、その後もアメリカ国内のインド独立運動支持派に受け継がれたのである³⁷⁾。

サウンドが会長に就任したアメリカ・ヒンドゥー協会もまた、穏健な路線からインド独立運動を支援する団体であった³⁸⁾。サウンドは会長演説の中で、協会の意義を米印両国の相互理解の補助にあると指摘し、これまでにアメリカ人の偏見や無関心に苦しんだ時期もあったものの、「会員の忠誠心とアメリカの友人達の鋭利な好奇心と熱烈な支持」を受け、米印の両文明国の間に固い友情の絆を築くことに貢献してきたと自負している³⁹⁾。この時の演説は、サウンドのインド独立問題に関する政治的信条が語られているという点でも興味深い。サウンドはイギリス帝国主義者が唱える家父長主義的なイギリス統治の恩恵論に対し、イギリス人はインドの「分割統治を普遍の金言」としており、「(インド人への)『教えや解放』が彼らの胸によぎることは決してない」と断じ、イギリスがインドに対して行っている行為は経済的搾取と不正義だと言明した。不誠実なイギリスに対して、その誠実性が強調されたのは、サウンドの尊敬するガンディーであった。聴衆に対してサウンドは、イギリスは武力や豊かさの面では、インドに勝っているものの、「非暴力・不服従の原則」を掲げるインドは、心の面で勝っていると指摘し、ガンディーの教えに基づいて、インド人自身の手でインドを救済する必要性を強調したのである。ガンディー思想の反映はまた、サウンドの演説が宗教への寛容さをインド史の特徴と掲げ、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の友好性を唱えている点からも窺えた⁴⁰⁾。

こうしたサウンドのイギリス統治批判とガンディーへの賞賛という構図は、1930年に出版した自著『マイ・マザー・インディア』でも繰り返された⁴¹⁾。この本のタイトルは、1927年にアメリカ人ジャーナリストのメイヨー (Katherine Mayo) が出版し、英米両国でベストセラーとなった『マザー・インディア』に対する反論の意味から付けられたものであった。「アメリカの成人向けのインド関連書籍において、これ以上の影響力をもった本は無い」と称されるメ

イヨーの本は、インドの幼児婚、寡婦問題、カースト問題、劣悪な衛生環境などを題材に、インドの後進性とイギリス支配の必要性を強調した内容になっていた⁴²⁾。メイヨーの本が出版されると、インド国内だけでなく、海外のインド人コミュニティからも大きな反論が巻き起こった。反論書の数も、サウンドの『マイ・マザー・インディア』も含めて、50冊以上にも上ったと言われるほどであった⁴³⁾。

メイヨーは、著書の中では執筆に先立つ約三か月間のインド滞在時の取材目的が公衆衛生の調査であり、政府や団体の支援などない私費による視察であったと記しているものの、先行研究が指摘するように、政治的中立性を保っていたとは考えにくかった⁴⁴⁾。親英派の社交クラブの役員を務めた経歴やイギリスから訪印調査費を援助されていることに鑑みれば、出版当時からインド系コミュニティが、彼女の説明を額面通りに受け取れなかったのも当然であった⁴⁵⁾。イギリス寄りのジャーナリストは、ガダル運動に対してもプロパガンダ攻勢を仕掛けていたが、『マザー・インディア』では、インド社会の問題点を衝撃的に描き、アメリカの人々のインドに対する印象操作を行った。一例を挙げると、メイヨーは著書の中で、インドが非文明的で専制的な国であり、男性支配に女性が苦しめられているという議論を展開した。この議論は、「アメリカ反帝国主義連盟」に属するブライアン（William J. Bryan）元国務長官や大実業家のカーネギー（Andrew Carnegie）のような「反帝国主義」の立場からインドの自治や独立を支持する人々へのアンチテーゼであった⁴⁶⁾。

メイヨーの男尊女卑論に対して、サウンドはイギリスの女性参政権を題材に、女性の参政権を求める運動家に対する誹謗中傷や暴力行為を指摘し、西洋の女性達もまた、長きに渡る男性支配から実質的に解放されていないと反論を加えた上で、『リグ・ヴェーダ』に記された女神の事例や愛妃のためにタージ・マハルを建設したムガル皇帝の事例等を引用し、イギリス統治下以前のインドでは、女性達は「夫の従順な召使い」などではなかったとの見解を提示した⁴⁷⁾。サウンドはまた、ガンディーの指導者としての影響力の弱体化を指摘するメイヨーに対しても、反証を挙げた⁴⁸⁾。サウンドは自著の中で、「ガンディーは今日、インドに住む3億人が認める指導者である」と断言し、世界中の様々な人々が大きな関心を寄せるインドの指導者に関する情報には「著しく誤った結論」も含まれると指摘する一方で、「多くの研究者、学生、宣教師、旅行者、作家は信頼できる意見を発するため、十分注意しながらガンディーに関する調査を行っている」と婉曲的にメイヨーのジャーナリストとしての力量を疑ったのである⁴⁹⁾。

サウンドは、地域コミュニティの講演会などでも、機会のある毎に、『マザー・インディア』が広めたイメージの払拭に勤しんだものの、その成果は芳しいものではなかった。全米黒人地位向上協会（NAACP）のようなインドの人種差別問題に共感を抱く団体や、一部のリベラルな知識人と教会関係者はインド系コミュニティに同情的であった。しかし、アメリカの一般読者は、サウンドが形容する「わずかの間、インド滞在中の著者」の作品を好意的に受

け止めたのである⁵⁰⁾。結局のところ、『マザー・インディア』問題を含めた一連のインド独立運動問題を通じて、サウンドを始めとするインド系コミュニティが実感したのは、市民権をもたない少数派の移民達がアメリカ社会で行う政治活動の限界性であった。

4. アメリカ市民権獲得への闘い

サウンドを始めとするインド系コミュニティ内のインド独立問題への政治的関心の高まりとは対照的に、アメリカ政府は基本的にイギリスのインド統治を支持する立場を取った⁵¹⁾。さらに、インド人の市民権問題に対するアメリカ政府の関心の低さが、国内外のインド人達を大いに落胆させた。インド系コミュニティは、アメリカ市民権獲得に向けて、1923年の最高裁判決の破棄と新たな移民法の制定という2つの側面から、様々な働きかけを行っていた。例えば、「ヒンドゥー陰謀論」事件で投獄されたものの、他のインド人活動家達とは異なり、1923年の最高裁判決後に市民権を剥奪されるまでアメリカ市民であったため、国外追放を免れたダスと彼のアメリカ人妻で、NAACPのメンバーでもあったモース (Mary Keatinge Morse) は、積極的なロビー活動を展開し、ペンシルベニア州選出のリード (David Reed) 上院議員を含めた数名の議員の協力を取り付け、1926年にインド人を白人と認める決議案の提出に成功した⁵²⁾。しかし、この決議案はジョンソン (Hiram Johnson) 上院議員を始めとするカリフォルニア州の議員や圧力団体の抵抗を受けて、棚上げとなった。1927年と28年には、ニューヨーク選出のコープランド (Royal S. Copeland) 上院議員とセラー (Emmanuel Celler) 下院議員が、同様の議案を提出するも、こちらも失敗に終わった⁵³⁾。ただし、議会での人種規定改定の失敗以上に、インド系コミュニティに大きな衝撃を与えたのは、ノーベル文学賞を受賞したタゴール (Rabindranath Tagore) が、1924年移民法の影響を受け、1929年にアメリカへの入国を拒否された事件であった。アメリカの民主制を評価してきたタゴールがこの事件でアメリカに幻滅したのは、イエス・キリストはアジア人であることからアメリカには入国できなかっただろうとの辛辣な批判からも明らかであった⁵⁴⁾。

1930年代になると、アメリカのインド系コミュニティの指導者達は、ビジネスで成功を収めたインド人実業家との連帯をより密にしなが、インドの独立支援と市民権獲得を目的とするロビー活動を進めていった。こうしたロビー活動の中核を占めたのは、アメリカ・ヒンドゥー協会の会長サウンドと在米インド福祉同盟の初代代表カーン (Mubarak Ali Khan) に加えて、これまでは政治活動には積極的に関わっていなかった在米インド商業会議所の初代会頭ジャグジット・シン (Jagjit Singh) であった⁵⁵⁾。ただし、福祉同盟はその後、パキスタン問題を理由に他のインド系コミュニティと袂を分かち、移民問題に関してもサウンド達の運動に反対しないものの、独自の路線を模索するようになったのである⁵⁶⁾。

サウンドの回顧録によれば、彼のアメリカの友人や協会関係者の中には、市民権運動の大義を疑う者はいなかったものの、インペリアル・カウンティのインド人達が激しい抗議活動を続けても、最高裁判決は覆らないとの見解が多数を占めていた。友人の中には、親切心から市民権獲得のための政治活動に係わるのを止めるよう忠告する者もいた。それでも、サウンドは妻と子供達全員がアメリカ市民権を有している中で、自分一人だけがアメリカ人ではない状況やインペリアル・カウンティの民主党中央委員会で積極的な支援活動を行いながらも、投票できないことへの不満という個人的な動機もあり、市民権運動への関与を深めていった⁵⁷⁾。以前、カリフォルニア州のインド人向けの戦時国債購入の促進運動に協力してくれた親友のサンガ(B. S. Sunga)の助力を、再び得られたこともサウンドを後押しする大きな要因となった⁵⁸⁾。

多くの先行研究が指摘するように、アメリカ国内でアジア系移民の市民権運動が大きく進展した重要な要素の一つは、アメリカの第二次世界大戦への参戦にあった。そこにはアメリカ社会のアジア人への人種差別を標的とした日本のプロパガンダへの対策や対日戦におけるインドの戦略的重要性が増加したため、アメリカの勝利のためにインド人の対米観を改善するという政府の政治的な意図が含まれていた⁵⁹⁾。しかし、ワシントンの政治を動かすのは容易ではなく、インド系コミュニティが草の根レベルで築いてきた親インド派のアメリカ人団体とのネットワーク網の存在なくして、移民法を修正するのは不可能であった。サウンドもまた、全美各地への遊説や何千通もの回状の発送という地道な作業を通じて、ネットワークの拡大に尽力した一人であった。その結果、より多くの市民がアメリカ国内外でのインド人の人種問題を認知するようになったのである。

インド人の市民権運動を支援した団体の中で、ワシントンで積極的なロビー活動を行い、新たな市民権法案の制定に深く関与したのが、1937年に結成された米印同盟であった⁶⁰⁾。同盟の諮問委員には、現職の議員であったセラー下院議員やサウスダコタ選出のムント(Karl E. Mundt)下院議員の他にも、NAACP会長のホワイト(Walter White)やアメリカ出版会の大家であったルース(Henry Luce)など、錚々たる顔ぶれが含まれていた。そして、米印同盟の影響力拡大に最も貢献したのは、同盟の会長に就任したジャグジット・シンであった。「一人圧力団体」とも呼ばれたシンは、ニューヨークを拠点に輸入業で成功を収め、その財力で同盟を支援するだけでなく、アメリカ人ジャーナリストにインド問題を取り上げるよう促していた⁶¹⁾。シンはまた、ルースの妻であり、アジア地域への共産主義勢力の拡大を懸念するコネチカット州選出の下院議員クレア(Clare B. Luce)の訪印を手配するなど、ルース夫妻との繋がりが強化していった。1946年の法改正の立役者であるルースとセラー両議員と緊密な関係を築いていたことに鑑みても、シンが市民権運動で果たした役割の大きさがわかる⁶²⁾。

ワシントンの政治を動かすには、アメリカ議員とのパイプを作る必要があると考えていたサウンドにとっても、シンは申し分のない人物であった⁶³⁾。サウンドは、シンの活動を支援する

ため、アメリカ・ヒンドゥー協会の理事達との協議の上、カリフォルニアのインド人達の市民権運動への動員に特化した新たな団体として、米印協会を1942年に立ち上げ、初代会長に就任した。米印協会は、主に地元のインド人向けの広報活動と資金活動を通じて、ワシントンでのロビー活動を後方から支援したのである⁶⁴⁾。

実際に議会で法改正を求める動きは、ルースとセラーが、1944年3月にインドから移民の割当とインド人への市民権付与を認める決議案を提出した時から始まった。インドからの移民受け入れの緩和を求める声は、サウンドの米印協会とシンの米印同盟だけでなく、インド国内と国務省からも上がっていた⁶⁵⁾。ルースとセラーの決議案は、1924年移民法以前に入国したインド人にものみ市民権を認める福祉同盟とランガー（William Langer）上院議員の決議案とは異なり、『ロサンゼルス・タイムズ』や『バルティモア・サン』を含む多くの新聞紙からの支持も受けていた。ところが、第78議会では、インド人移民への規制を緩和する決議案は、戦時下の英米関係への悪影響を懸念する南部の民主党議員と保守的な共和党議員の反対を受け、本会議どころか下院の移民委員会で棚上げとされたのである。

決議案不成立の報は、インド国内での対米感情を悪化させた。インド国内の新聞報道の中には、今回の仕打ちが戦後の米印関係にも反映されることを示唆し、アメリカの人種差別を厳しく非難するものも現れた。その結果、アメリカ議会内では、インド人移民の市民権について、早急に対処すべきとの機運が再び高まった。当然ながら、市民権運動の支持者達はこの機会を逃さなかった。翌年に第79議会が召集されると、ルースとセラーは、三名の議員を加えた五名で、再び決議案を提出した。セラー議員はまた、ローズヴェルト大統領と国務省に親書を送り、決議案の支援を求めることで、行き詰まりの打開を図ったのである⁶⁶⁾。

今度の決議案は下院の委員会を通り、本会議での審議にかけられることになった。45年決議案の下院委員会通過には、ローズヴェルト大統領の後押しも重要であった⁶⁷⁾。セラーの親書に返信することなく死去した大統領は、イギリス帝国主義の問題に無関心ではなかったものの、チャーチル（Winston Churchill）首相からの激しい抵抗もあり、インド独立問題では大幅な譲歩を行っており、イギリスとの関係性を犠牲にしてまでインドに肩入れする意図を有していなかった⁶⁸⁾。その一方で、インドでも大西洋憲章の影響で高い人気を誇ったローズヴェルトは、個人特使であるフィリップス（William Phillips）を通じて、市民権法案への支持をインド側に示唆したように、将来的な米印関係にも一定の配慮を行っていた。英印とのバランスに注視する大統領は、アメリカ国内のインド人市民権問題に関しては、米印両国の国益に鑑み、法案を支持する立場を移民委員会の委員長宛の親書で明らかにしていたのである⁶⁹⁾。

ローズヴェルトの助力もあり、1945年10月に下院を通過した決議案は、上院では南部の民主党議員と中西部の共和党議員が反対に回る厳しい状況に置かれていた。とりわけ、上院の移民委員会では、委員長のジョージア州選出のラッセル（Richard B. Russell）議員が反対の急先

鋒となり、審議すら拒絶する強硬な姿勢を見せていた⁷⁰⁾。ジム・クロー体制の支持者であるラッセルや南部の民主党議員達の多くは、戦時中は勝利を優先するため、1943年の排華法の撤廃（マグヌソン法）にも一定の理解を示したものの、基本的に白人以外の移民の受入れに否定的であり、戦後になると元来の立場からルースとセラーの決議案に異議を唱えたのである⁷¹⁾。

ラッセルが審議を止めている間、インド国内の対米感情は悪化の一途をたどっていた。1945年10月にはネルーが、戦時中のアメリカの対印政策をイギリスの帝国支配を助長するものであったと露骨に批判した。その4か月後には、カリカットに駐留中のアメリカ人兵士が襲撃される事件も発生していた⁷²⁾。だが、こうした米印関係の緊張の高まりは、ルースとセラーの決議案がラッセルの妨害を乗り越える機会にもなった。米印関係に憂慮するトルーマン（Harry S. Truman）大統領からの度重なる説得や他の上院議員からの厳しい批判を受けたラッセルは、最終的には公聴会を開かざるを得ない状況に追い込まれていったのである。委員会を通過したルースとセラーの議案は、無事に上院本会議も通過し、1946年7月にトルーマンの署名を受けて、正式な法律となった⁷³⁾。1923年の最高裁判決以来、事実上、閉ざされていたインド人の市民権獲得の道が、再び解放された瞬間であった。

5. おわりに

ルース＝セラー法が制定されると、サウンドはすぐに帰化申請を開始した。サウンドを驚かせたのは、法務省の移民帰化局が、アメリカ入国以降の彼の政治活動を詳細に把握していたことであった。審査場で指摘された日時の講演内容の説明を求められたサウンドは、イギリスのインド統治を批判し、ガンディーの政治運動を支持する演説を行ったと正直に説明した。過去の政治活動の影響もあったのか、帰化が許可されるまでには思った以上に時間がかかったものの、サウンドは1949年12月16日にアメリカ市民となった⁷⁴⁾。カリフォルニアのインド系コミュニティで様々な政治運動を指揮してきたサウンドはその後、インペリアル・カウンティの民主党中央委員会メンバー、ウェストモーランド市の判事職を務めた後、1957年にはアジア系初のカリフォルニア州選出の下院議員となった。シンを代表とするルース＝セラー法のロビー活動で指導的立場にあったインド人の多くが、アメリカ市民権を申請せず、やがて独立後のインドに帰国したことに鑑みれば、サウンドは同法の成立に携わった人物の中で、その恩恵を最も受けた人物と言えよう⁷⁵⁾。

ルース＝セラー法は、インド人の移民割当数が年間100人程度だけであり、一般的には人種差別的条項を撤廃した1965年移民法に向けた改革の第一歩としての印象が強い⁷⁶⁾。しかし、アメリカのインド系コミュニティにとって、ルース＝セラー法の意義は、従来認識以上のものであった。第一に、同法は妻子の呼び寄せを可能とし、1917年から1946年までの約30年間の移

民制限により、消滅の危機に瀕していたインド系コミュニティの再活性化をもたらした⁷⁷⁾。第二に、同法の厳しい人数制限下で、渡米してきた人々は、より高い学歴と専門性を有しており、その後のインドコミュニティ発展の礎となった⁷⁸⁾。こうした戦後移民の一人が、サウンドと同じ、カリフォルニア大学バークレー校で博士号を取得した後、癌研究者となったハリス副大統領の母、ゴーパーランであった。インド系コミュニティの存続と戦後のアメリカ社会で活躍する人材輩出という側面で大きな役割を果たしたルース=セラー法は、1965年の移民法と共にインド系アメリカ人の歴史のメルクマールとして、再解釈されるべきであろう。

このように本稿では、ルース=セラー法の制定にも携わったサウンドの前半生を軸に、20世紀前半におけるアメリカのインド系コミュニティが、インド独立運動と市民権運動にどのように関与してきたのか、考察を行った。その一方で、パキスタン問題がアメリカのインド系コミュニティに与えた影響ならびに福祉同盟のランガー決議案については、誌面の制約もあり、十分に検討できなかった。この点については、今後の研究課題としたい。

注

- 1) ジョー・バイデンとカマラ・ハリスの両名の勝利演説については、以下のサイトを参照。バイデン氏勝利宣言演説・全文完訳「アメリカの魂を取り戻す」〈アメリカ大統領選〉、『東京新聞』2020年11月12日、<https://www.tokyo-np.co.jp/article/67130>；初の女性副大統領へ「私が最後ではない」カマラ・ハリス氏の演説全文 完訳〈アメリカ大統領選〉『東京新聞』2020年11月11日、<https://www.tokyo-np.co.jp/article/67134>
- 2) 例えば、以下のようなものがある。Sharon Austin, “Before Kamala Harris, Many Black Women Aimed for the White House,” *The Conversation*, November 10, 2020, <https://theconversation.com/before-kamala-harris-many-black-women-aimed-for-the-white-house-149729>, accessed 12/21/ 2020; Dinyar Patel, “Kamala Harris and the ‘Other 1 Percent’: Long Before the Democratic Vice-President Candidate Became A National Figure, India Played A Role In American Politics,” *The Atlantic*, October 7, 2020, <https://www.theatlantic.com/international/archive/2020/10/kamala-harris-india-politics-singh/616624/>, accessed 12/21/2020; 小峰翔「カマラ・ハリス氏 黒人文化に思い入れ」『読売新聞』、2020年11月10日。
- 3) Madeline Y. Hsu & Ellen D. Wu, “‘Smoke and Mirrors’: Conditional Inclusion, Model Minorities, and the Pre-1965 Dismantling of Asian Exclusion,” *Journal of American Ethnic History* Vol. 34 No. 4 (Summer 2015), 44-45.
- 4) Arun Venugopal, “The Truth Behind Indian American Exceptionalism,” *The Atlantic*, January/February 2021 Issue, <https://www.theatlantic.com/magazine/archive/2021/01/the-making-of-a-model-minority/617258/>, accessed 2/7/2021.

- 5) 若干ながらも戦前のインド系アメリカ人に言及した邦語文献としては、以下のものがある。関口真理「アメリカのインド人」,古賀正則ほか編『移民から市民へー世界のインド系コミュニティ』(東京大学出版会、2000年)。
- 6) 第二次大戦からの米印関係を論じる実証研究としては、以下のようなものがある。Gary R. Hess, *America Encounters India, 1941-1946* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1971); H. W. Brands, *India and The United States: The Cold Peace* (Boston: Twayne Publishers,1990); Dennis Merrill, *Bread and the Ballot : The United States and India's Economic Development, 1947-1963* (Chapel Hill : The University of North Carolina Press, 1990); Denis Kux, *India and the United States:Estranged Democracy* (Washington D.C: National Defense University Press, 1993) ; Robert J. McMahon, *The Cold War on the Periphery : The United States, India and Pakistan* (New York: Columbia University Press,1994).
- 7) Joan M. Jensen, *Passage from India: Asian Indian Immigrants in North America* (New Heaven: Yale University Press,1988) は戦前期の北米におけるインド系コミュニティの歴史を詳細に論じた数少ない研究の一つである。
- 8) Christine L. Garlough, "Indian Americans," in Richard Schaefer ed., *Encyclopedia of Race, Ethnicity, and Society* (Thousand Oaks, CA: Sage, 2007), 710.
- 9) 一説によると、1910年代に約5000人であったアメリカにおけるインド人の人口は1946年には約1600人まで減少していた。関口、前掲書、206頁。
- 10) Juan L. Gonzales Jr. "Asian Indian Immigration Patterns: The Origins of the Sikh Community in California," *The International Migration Review*, Vol. 20, No.1 (Spring, 1986), 40.
- 11) Karen Leonard, "Historical Constructions of Ethnicity: Research on Punjabi Immigrants in California," *Journal of American Ethnic History* Vol. 12, No. 4 (Summer, 1993), 3-26.
- 12) Jason Richwine, "Indian Americans: The New Model Minority," *Forbes*, February 24, 2009, https://www.forbes.com/2009/02/24/bobby-jindal-indian-americans-opinions-contributors_immigrants_minority.html?sh=352b54c4583b, accessed 12/21/2020.
- 13) 例えば、以下のような文献がある。Gerald Horne, *The End of Empires: African Americans and India* (Philadelphia: Temple University Press, 2008); Paul M. McGarr, *The Cold War in South Asia: Britain, the United States and the Indian Subcontinent, 1945-1965* (Cambridge: Cambridge University Press, 2013); Seema Sohi, *Echoes of Mutiny: Race, Surveillance & Indian Anticolonialism in North America* (Oxford: Oxford University Press, 2014).
- 14) Saund, Dalip Singh (Judge) US House of Representatives: History, Art & Archives, <https://history.house.gov/People/detail/21228>, accessed 12/30/ 2020.
- 15) D S Saund, *Congressman from India* (New York: E P Dutton and Company Incorporated, 1960), 27-29, 32-34.
- 16) Ross Bassett, "MIT-Trained Swadeshis: MIT and Indian Nationalism, 1880-1947," *Osiris* Vol. 24, No.

- 1 (2009), 213-214.
- 17) ボースによれば、1915年の時点で200人以上のインド人（ヒンデュー）学生がアメリカの高等教育機関に在籍していた。Sudhindra Bose, “American Impression of A Hindu Student,” *Forum* (February, 1915), 251.
- 18) Saund, *Congressman from India*, op. cit., 44-45.
- 19) Saund, Dalip Singh (Judge) US House of Representatives: History, Art & Archives, op. cit.
- 20) Saund, *Congressman from India*, op. cit., 39, 42-43
- 21) Agnes Foster Buchanan, “The West and the Hindu Invasion,” *Overland Monthly*, April 1908.
- 22) Sohi, op. cit., 8.
- 23) Ibid., 30; 水上香織「20世紀初頭バンクーバーにおけるインド系移民コミュニティの形成」『南アジア研究』第26号（2014年）、127頁。
- 24) Sucheta Mazumdar, “Colonial Impact and Punjabi Emigration the United States,” in Lucie Cheng & Edna Bonacich, ed., *Labor Immigration Under Capitalism: Asian Workers in the United States Before World War II* (Berkeley: University of California Press, 1984), 324, 332; Immigration and Exclusion, University of Washington Libraries, <https://www.lib.washington.edu/specialcollections/collections/exhibits/southasianstudents/immigration>, accessed 12/30/2020.
- 25) Gary R. Hess, “The Forgotten Asian Americans: The East Indian Community in the United States,” *Pacific Historical Review* Vol. 43 No.4 (November, 1974), 576.
- 26) Gonzales, op. cit., 41; Jansen, op. cit., 38.
- 27) Ronald Takaki, *Strangers from A Different Shore: A History of Asian Americans: Update and Revised* (New York: Back Bay Book, 1998), 313-314; Hess, “The Forgotten Asian Americans: The East Indian Community in the United States,” op. cit., 578.
- 28) Saund, *Congressman from India*, op. cit., 45.
- 29) Ashok Sharma, *Indian Lobbying and its Influence in US Decision Making: Post-Cold War* (New Delhi: SAGE Publication Inc, 2017), 80; Venugopal, op. cit; Erika Lee, *The Making of Asian America: A History* (New York: Simon & Schuster Paperbacks, 2015), 172-173.
- 30) Ibid., 166.
- 31) Jensen, op. cit., 256-258.
- 32) Saund, *Congressman from India*, op. cit., 64-65.
- 33) Ibid., 53-54, 56-58.
- 34) Ibid., 38.
- 35) 北米でのインド人留学生のガダル運動に関しては、前掲のSohiを参照。
- 36) Jensen, op. cit., 163, 182; Sohi, op. cit., 183-184, 189, 204.
- 37) Hess, “The Forgotten Asian Americans: The East Indian Community in the United States,” op. cit.,

- 585-588.
- 38) Sharma, op. cit., 80.
- 39) Dalip Singh Saund, “Presidential Address to the 14th Annual Convention of the Hindusthan Association of America, Held at New York City,” 3-4, South Asian American Digital Archive (SAADA), <https://www.saada.org/item/20130123-1236>, accessed 1/3/2021.
- 40) Ibid., 6-7, 11-12.
- 41) Dalip Singh Saund, *My Mother India* (Stockton CA: The Pacific Coast Khalsa Diwan Society, INC, 1930).
- 42) Andrew J. Rotter, *Comrades at Odd: The United States and India, 1947-1964* (Ithaca: Cornell University Press, 2000),1; Asha Nadkarni “ ‘World-Menace,’ : National Reproduction and Public Health in Katherine Mayo’s ‘Mother India’ ,” *American Quarterly* Vol. 60 No. 3 (September., 2008), 805-827; 小松久恵「アメリカ人が描いた20世紀初頭インドの輪郭『マザー・インディア』を読む」『コンタクト・ゾーン』4巻（2011）、85－96頁。
- 43) 小松、前掲書、86頁。
- 44) Katherine Mayo, *Mother India* (New York: Blue Ribbon Book, 1927), 11-12.
- 45) Horne, op. cit., 132; M S Venkataramani & B K Shrivastava, *Roosevelt Gandhi Churchill: American and the Last Phase of India’s Freedom Struggle* (New Delhi: Radiant Publishers1983), 344.
- 46) Nadkarni, op. cit., 808.
- 47) Saund, *My Mother India*, op. cit., 15-34.
- 48) Mayo, op. cit., 19.
- 49) Saund, *My Mother India*, op. cit., 108-109.
- 50) Saund, *Congressman from India*, op. cit., 48.
- 51) Jensen, op. cit.,163.
- 52) Jane H. Hong, *Opening the Gates to Asia: A Transpacific History of How America Repealed Asian Exclusion* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2019), 1.
- 53) Gary R. Hess, “The ‘Hindu’ in America: Immigration and Naturalization Politics and India, 1917-1946,” *Pacific Historical Review* Vo. 38, No. 1 (February., 1969), 66-70.
- 54) Ibid., 70; Takaki, op. cit., 298.
- 55) “A Voice for the 400 Million,” *New York Post*, August 9 1943; Sharma, op. cit., 80.
- 56) Hess, “The ‘Hindu’ in America: Immigration and Naturalization Politics and India, 1917-1946,” op. cit., 74.
- 57) 文献の中には、マリアンはサウンドとの結婚により、アメリカ市民権を失ったとするものもある。
- 58) Saund, *Congressman from India*, op. cit.,72-74.
- 59) Hong, op. cit., 8-9; Harold A. Gould, *Sikhs, Swamis, Students, and Spies: The India Lobby in the United States, 1900-1946* (New Delhi: Sage Publications, 2006), 334; Prema Kurien, “Shifting U.S.

- Racial and Ethnic Identities and Sikh American Activism,” *RSF: The Russell Sage Foundation Journal of the Social Sciences* Vol. 4, No. 5 (August, 2018), 88.
- 60) Jensen, op. cit., 276-277. Jensenは米印同盟の設立を1938年としているが、同盟が刊行した資料によれば、発足は1937年となっている。Information about the India League of American, SAADA, <https://www.saada.org/item/20120712-729>, accessed 1/07/2021.
- 61) Robert Shaffer, “J.J. Singh and the Indian League of America, 1945-1959: Pressing at the Margins of the Cold War Consensus,” *Journal of American Ethnic History* Vol. 31 No.2 (Winter 2012), 68-71; Jensen, op. cit., 277.
- 62) Kurien, op. cit., 88.
- 63) Premdatta, Varma, “The Asian Indian Community’s Struggle for Legal Equality in the United States, 1900-1946,” Ph.D. Dissertation, University of Cincinnati, 1989, 430-431.
- 64) Inder Singh, “Dalip Singh Saund: From Stockton Gurdwara to US Congress,” Sikh Journey in America Conference Paper, September 22, 2012, 4.
- 65) Varma, op. cit., 446.
- 66) Ibid., 413; Hess, “The ‘Hindu’ in America: Immigration and Naturalization Politics and India, 1917-1946,” op. cit., 74-75; Hong, op. cit., 68-69.
- 67) Hess, “The ‘Hindu’ in America: Immigration and Naturalization Politics and India, 1917-1946,” op. cit., 76; Jensen, op. cit., 279.
- 68) インド問題をめぐるローズヴェルトの立場については、以下の文献を参照。Venkataramani & Shrivastava, op. cit.; Kenton J. Clymer, “Franklin D. Roosevelt, Louis Johnson, India and Anticolonialism: Another Look,” *Pacific Historical Review* Vol. 57, No.3 (August, 1998), 261-284.
- 69) Jensen, op. cit., 279.
- 70) Letter from John Alden and Viola P. Buckler to Senator Richard B. Russell, May 15, 1945, SAADA, <https://www.saada.org/item/20150429-4149>, accessed 3/16/2021.
- 71) Hong, op. cit., 76-78.
- 72) “Calcutta Restive as Peace Returns,” *New York Times*, February 15, 1946.
- 73) Hess, “The ‘Hindu’ in America: Immigration and Naturalization Politics and India, 1917-1946,” op. cit., 76-78; Jensen, op. cit., 279.
- 74) Saund, *Congressman from India*, op. cit., 75-76.
- 75) Hong, op. cit., 79-81.
- 76) 関口、前掲書、198頁。
- 77) 当時のインド系コミュニティの問題の1つは、男女比の著しい偏りであった。サウンドのようなアメリカ人女性との結婚は稀な事例であり、インド人男性とメキシコ人女性との結婚の方が多かった。その結果、インド人のメキシコ系コミュニティへの同化も一部で進んでいた。Lawrence A. Wenzel, “The Rural Punjabis of California: A Religio-Ethnic Group,” *Phylon* Vol. 29, No.3 (1968), 252-253.

- 78) Gonzales, op. cit., 49-50; Jeffrey Lehman, ed., *Gale Encyclopedia of Multicultural America 2nd Edition* (Detroit: Gale, 2000), 149.

(みぞぐち・そう 外国語学部助教)